

Jan. 2016

ZENBI

全国美術館会議機関誌

January 2016 [vol.9]

Empowering Your Vision



デジタル高精細撮影への転換 4"×5"から無限大へ。

NISSHA はデジタル高精細撮影の無限の可能性を追及しています

従来の「4×5」ポジフィルムよりも高解像度なのにリーズナブル。
印刷用に画像分解する必要もなく、また色褪せることもありません。



最大 28 億画素まで。データ活用にあった仕様で撮影
赤外線高精細デジタル撮影が可能
豊富な国宝・重要文化財のデジタルアーカイブ実績
文化財、美術品のあるところ、どこでも出張撮影

NISSHA

日本写真印刷株式会社／日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

東京都港区大崎 2-11-1 大崎ウィズタワー TEL：03-6414-7300 担当：梅澤
京都市中京区壬生花井町 3 TEL：075-823-5152 担当：中上

CONTENTS

ブロック報告

2	〔北海道〕「北海道150年」を前に 大下智一
4	〔東北〕路の奥で何と出会うかー東北のアート・プロジェクトに思うー 齋藤桃子
6	〔関東〕各美術館の研究成果を発表し、美術館の個性を磨く活動に期待する 松下由里
8	〔東京〕東京で見えてきたいくつかのこと 遠藤 望
10	〔北信越〕日本の美は北陸にあり!? 二木裕子
12	〔東海〕思いのままに、展覧会そぞろ歩き 坪井則子
14	〔近畿〕コレクション展に思う 岸野裕人
16	〔中国〕被爆70周年事業と上半期の活動 福永 治
18	〔四国〕コレクション展のあれこれと、これから 太田恵美子
20	〔九州〕戦争と近代、そしてリニューアル 秋山沙也子

部会報告

22	—— 保存研究部会 根本亮子
23	—— 教育普及研究部会 清家三智
24	—— 情報・資料研究部会 鴨木年泰
25	—— 小規模館研究部会 喜田早葉江
26	—— ホームページ部会 宮武 弘
27	—— 機関誌部会 尾崎信一郎
28	—— 美術館運営制度研究部会 貝塚 健
29	—— 地域美術研究部会 山田 諭

賛助会員各社 30

事務局から 31

編集後記 32

投稿要領 33

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 33

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.9 2016年1月1日発行 ©全国美術館会議

〔編集〕全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎 青山杏子

〔発行者〕全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

〔デザイン〕宮谷一孝（日本写真印刷コミュニケーションズ）〔印刷〕日本写真印刷株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

「北海道 150 年」を前に

大下智一（おおした ともかず・北海道立函館美術館）



当たり前のことだが、美術は時代を映し出す。その時代のものの見方、ファッションモード、政治性…。さまざまな価値観がそこには反映され、世代を超えて受け継がれる。ということは、美術館における展覧会も同じように時代を映し出すものであるといえよう。

来る 2018 年は、開拓史が設置され、蝦夷地から「北海道」に改称された 1868 年から数えて「150 年」の年に当たる。現在の知事は公約として、「北海道 150 年記念事業」の実施を掲げている。ちなみに、「北海道 100 年記念事業」の年に当たる 1968 年には、ハード、ソフト、イベントを含め、大々的な事業が打ち出された。そのなかの一つが、1971 年に開館した北海道開拓記念館の建設であった。

今年 2015 年、その北海道開拓記念館は道立アイヌ民族文化研究センター（1994 年開所）と統合され、新たに「北海道博物館」として開館した。常設展示はリニューアルされ、「北東アジアのなかの北海道」、「自然と人とのかかわり」をコンセプトに、北海道の自然・歴史・文化を、5 つのテーマで紹介（同館 HP）している。なかでも、「アイヌの歴史や有形・無形の文化に関する専門的研究組織を有する世界に誇るべき総合博物館として、アイヌ文化の振興に寄与するとともに、多文化共生社会の実現に貢献」（同館 HP）とあるように、アイヌ民族に関わる展示が充実した。

その北海道博物館で、今年行われた特別展が、「夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界—」

展（9 月 5 日～11 月 8 日）である。

松前藩家老にして、優れた絵師であった蠣崎波響（1764-1826）。その波響が、アイヌ民族の蜂起に際して、騒動の収拾を図ったアイヌの指導者 12 人の肖像を描いたのが《夷酋列像》だ。絢爛な蝦夷錦を着込んだ姿が精緻に描かれた画は、見る者を圧倒する。

しかし、それらが描かれた背景には、松前藩が抱える北方警備という問題があることが指摘されている。従ってそこには、リアルとフィクション、政治的配慮と美的関心、記録と演出、その他相反するさまざまな要素が入り組んでいる。それでも、《夷酋列像》は、当時から大きな関心を引き、たくさんの模写本が生み出された。それは、単なる記録を超えた美的感動がなされたことでもあろう。これが、美術が持つ大きな力であるし、またそれは、美の世界だけにとどまらない、さまざまな方向へと影響を及ぼしていく。この展覧会も大きな話題と多くの観覧者呼んだ。やはり展覧会の及ぼす影響力も、一つの世界にはとどまらないものだと感じさせられた。

今回の北海道博物館のリニューアルで印象的なのは、その名前から「開拓」という文字が外れたところにある。「北海道 100 年」当時も、北海道の起源を「開拓使」に置くことが、「アイヌ民族軽視」であるという批判があったことを思い起こさせるからだ。

例えば、「北海道 100 年」とほぼ同時期に行われた「写真 100 年—日本人による写真表現の歴史展」（1968 年）で、田本研造を中心とした明治初年の開

拓写真が、「ドラマティックなまでのドキュメント群」として大いに注目を浴び、再評価された。その一方で、これらの写真の多くは、開拓を推進する為政者の依頼を受けて撮影されたものであり、場合によっては、作為的な場面の撮影を要求された可能性があること、また開拓事業が先住者にとっての「侵略」であったことが指摘されている。

さらに、開拓事業は、開拓使時代に終わったものではない。その後も、多くの入植者を呼んだ炭鉱、酪農などさまざまな事業が失敗し、その影響は近年、いや現代まで及んでいると言えよう。

共和町の西村計雄記念美術館をはじめ、同町の複数の施設で同時開催された「前川茂利展」（9 月 2 日～10 月 12 日）も、「北海道開拓」というテーマを改めて考えさせられる展覧会であった。開拓農家の二代目として共和町に生まれた前川茂利（1930-99）は、郵便局の外務員として働きながら、そこに生きる人々の生活を丹念に写した。なかでも、写真集「開拓地のくらし」は、戦後新たに入植した人々の生活を、28 年にわたって追い続けた、渾身の力作である。

1948 年、わずかな営農資金だけを元手に、45

戸の人々が棄民同然に入植した。彼らが入植した共和町小沢開拓地は、もともと明治時代に開拓が行われたが、高冷地のため、一度捨てられた土地である。当然、彼らの生活は困窮を極め、自殺、離農、さまざまな理由で集落の人々は減っていく。結局、1976 年、最後の一人が離農し、集落は消滅する。その間、前川は彼らの生活に寄り添いながら、写真を撮り続けた。恵まれない土地で懸命に働く様子や、苦悩する様子、さらには、そうした生活のなかで見る子供たちの笑顔や、寄り添う家族の姿には、わずかながらの希望が見いだせよう。

本展では、コントラストの効いたモノクロームのオリジナルプリントにより、写真家・掛川源一郎が「強烈なリアリズムで一貫しながら、その底には温かい血が通っている」と評した前川の写真を紹介していた。

それらの写真はまた、歴史資料としても高い価値を持つ。実は、戦後北海道に入植した人々の想像を絶する厳しい生活が、「北海道 100 年」と浮かっていた当時も続いていたことを改めて我々に伝えている。

2018 年の「北海道 150 年」。そのとき、美術は、美術館は、どんな役割を果たすのだろうか。



「前川茂利展」会場風景
人物は会場を訪れた前川茂利氏夫人ハツエ氏
西村計雄記念美術館提供



「夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界—」展会場風景

路の奥で何と出会うか —東北のアート・プロジェクトに思う—

齋藤桃子(さいとう ももこ・岩手町立石神の丘美術館)

これまでも多くの報告があるように、近年は展示のために設えられた場所から飛び出した展示、アート・プロジェクトが盛んである。規模の大小はあれど、いつもどこかで何かが進行中という状況が続いている。展示のための場所ではない場所に展示をすることは、その実現のためにより多くの熱量を必要とする。そして、情報量の多い生活空間や自然環境は、異質だと思われた作品も簡単にのみこんでしまう。場に集う人々と労を積極的に共有してゆけるか、それぞれ背景を持つ人々がその場で何と出会うのか、土地と作品が新しい磁場を形成できるか、これはなかなか難しいことである。

当館ではこの秋、2006年からおよそ隔年開催してきたシリーズ企画「石神の丘アートウォーク展」の最終回を開催した(10月3日～11月8日)。小規模な館ではあるが、石神山の斜面を利用した広い屋外展示場をもつ当館にとって、この自然環境を生かし、岩手にゆかりある若い世代の美術家の制作発展の機会とし、さらに来館者にとって〈今〉うまれる作品と出会う場をつくろうと取り組んできたものである。館内と屋外、ときに街中に、と状況の異なる環境に作品を展示してきた。当館の屋外展示場の自然はだいたい飼いならされたものではあるが、それでも、その中で作品を展示することはなかなか大変なものだと実感している。そんなこともあって、美術館という建物の外で何が展かれ、示され、来場者はそこで何と出会うのか、ということにとっても興味の湧くところなのである。

秋田県上小阿仁村では「KAMIKOANI プロジェクト秋田2015」(8月1日～9月13日)が今年も開催された。「第5回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2012」の飛び地開催としてはじまり、今回で4度目となる。面積の92%が山林原野、人口およそ2,500人。上小阿仁村は、秋田県の中で最も人口が少なく、最も高齢化が進んでいる地域である。昨年と同様、廃校を利用した小沢田と沖田面、そして八木沢の3ヶ所を会場に、延べ32名の作品が展示された。中でもこのプロジェクトのはじまりである八木沢会場は、そこを指しそこで過ごす時間自体が記憶に残る。この奥に人家があると思えない道を進んだ先に現れる集落は、マタギにルーツを持つ。現在暮らすのは8世帯。黒々とした秋田杉に囲まれ、手入れの行き届いた田畑を背景に作品を訪ね歩きながらこのプロジェクトのテーマ〈ただ、ここに、在り続けたい〉の言葉が沁み入る。

青森では梵珠山に登った。〈青森に根ざした新たなアートを探求していく〉として、2012年より青森県立美術館が対象や方法を変えながら継続しているプロジェクト「青森 EARTH」の会場の一つを訪ねるためである。今年のテーマは〈みちの奥へ〉。津軽半島を主なフィールドとし、3名のアーティスト:石川直樹、鴻池朋子、森永泰弘の「展覧会」「ワークショップ」「成果発表」が予定されている(プロジェクト期間は2015年8月28日～2016年3月27日、そのうち「展覧会」は、8月28日～9月23日に次

の会場で行われた。石川直樹・大山ふるさと資料館／鴻池朋子・県立自然ふれあいセンター〔梵珠山〕／森永泰弘・外ヶ浜町中央公民館)。鴻池の作品はビジターセンターと山道途中の休憩所天井の2ヶ所に設置されている。先にセンター内で山という異界に触れるような展示を観た後、山頂を目指す。登ること1時間強。山頂を踏む必要はなかったのだけれど、山の空気を吸い、作品を反芻するように思い返し歩くのは新鮮な経験であった。この後、プロジェクトがどのような展開をみせるのか期待したい。

岩手では「街かど美術館 アート@つちざわ〈土澤〉」(花巻市東和町／2005年～)、青森では「十和田奥入瀬芸術祭」(十和田市／2013年～)、秋田では「ゼロダテ」(大館市／2007年～)、「ネオ・クラシック!カクノダテ」(仙北市角館町／2011年～)、山形では、「ひじおりの灯」(大蔵村南山村折温泉／2007年～)、「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ」(山形市／2014年～)、福島では「精神の〈北〉へ」(会津地方／2012年～)、「会津・漆の芸術祭」が発展し開催されている「あいづまちなかアートプロジェクト」(会津若松市／2013年～)、「土湯アラフドアートアニュアル」(福島市土湯温泉／2013年～)、宮城では「登米アートトリエンナーレ」(登米市／2010年～)等々、本年

休止しているものもあるが、実行主体も内容も様々に各県で多くのプロジェクトが展開されている。祝祭的に開催される大規模なビエンナーレ、トリエンナーレに対し、これらのアート・プロジェクトには、人口減少・過疎・高齢化への問題意識、東日本大震災の体験・記憶を含め、土地の歴史や風習、自然環境を見つめ直すこと、地域を活性化すること等々、切実な社会的問題へのアプローチをアーティストや作品の介入によって図りたいという意図がより重く込められているようだ。その是非はあるにしても、アート・プロジェクトを契機に、路をたどり、未知の場所を目指し、道すがらの空気や土地の言葉、食べ物に触れること。あるいは、その土地に親しみよく知っているはずの事物を未知のものとして感じる。路の奥にかすかに残り、失われようとしている生き方・暮らし方に触れること。そういった体験が希望につながるものであるのだと信じたい。

最後に、福島で開催されている「Don't Follow the Wind」について記しておく。この展示は、2015年3月11日から終了日を定めずにはじまっている。今は、それを見に行くことが叶わない。なぜなら、会場4ヶ所は、東京電力福島第一原子力発電所事故による帰還困難区域内にあるためである。いつかくだらう封鎖が解かれる日に、路をたどり、その奥で何と出会うことになるのか。想いは巡る。



KAMIKOANI プロジェクト秋田2015
木村剛士・二宮諒 (Bearer of a message)



青森 EARTH2015 みちの奥へ
県立自然ふれあいセンター(梵珠山)における鴻池朋子の展示

各美術館の研究成果を発表し、 美術館の個性を磨く活動に期待する

松下由里 (まつした・ゆり 群馬県立近代美術館)

2015 年度上半期の関東ブロックの展覧会について、報告者の所在する群馬県を中心に印象に残った展覧会を報告することとした。

群馬県は、全国美術館会議に参加している公立美術館に限定しても開館 40 周年を迎えた群馬県立近代美術館から、開館して 3 年のアーツ前橋まで、それぞれの美術館の開館時の社会の要望を反映して設立理念も大きく変化し、結果として、展覧会の内容にはっきりと各美術館のカラーとして現れているようだ。さて、上半期における各館の個性が顕著な自主企画展をみるならば、群馬県立館林美術館の「山名文夫とアール・デコ―資生堂スタイルの確立者」(4 月 25 日～6 月 28 日)、アーツ前橋の「小泉明郎―捕らわれた声は静寂の夢を見る」(3 月 21 日～6 月 7 日)、群馬県立近代美術館では「戦後日本美術の出発 1945-1955―画家たちは『自由』をどう表現したか―」(9 月 19 日～11 月 3 日)を挙げたい。他に、横浜美術館「石田尚志 渦まく光」(3 月 28 日～5 月 31 日)、宇都宮美術館「パウル・クレー だれにもないしょ。」(7 月 5 日～9 月 6 日)、埼玉県立近代美術館で開催された「すごいぞ、これは!」(9 月 19 日～11 月 3 日)についても報告したい。

館林美術館の「山名文夫とアール・デコ―資生堂スタイルの確立者」は、この美術館の特徴としてフランスのアール・デコ時代の動物彫刻家、フランソワ・ポンボンの作品を所蔵していることにつながるがある。また、版画作品がコレクションの大半を

占め、2001 年の開館以来、版画や挿絵の展覧会をたびたび開催してきた歴史からも、山名文夫のデザインを紹介することに意義があった。2013 年に「バルビエ×ラブルール展」を開催したことともつながっている。利用者にとっては、アール・デコ、グラフィック・アートと両方の点から館林美術館のこれまでの活動とつながる内容であったといえる。

アーツ前橋の「小泉明郎―捕らわれた声は静寂の夢を見る」には、映像の持つ力、つまり映像の持つトリッキーな力、さらにいえばある種の危険性を暴露するような意図があった。たとえば、ドキュメンタリーとして印象づけられた最初の印象が、続いて示されたカメラの位置や音声の転換によって内容がひっくり返される作品など、「映像による映像への言及」が顕著であり、同時に映像の圧倒的な力を見せつけるような作品が並んだ。この展覧会では、前橋で開催することに軸足を置いて、70 年前の前橋空襲の体験談を語る作品が新作として出品されており、この館の活動の理念である地域とアートを結びつける意欲が感じられた。土地の記憶を呼び覚ます展示といえいいだろうか。かつての公立美術館は、その地域の作家を顕彰する役割を担ったが、アーツ前橋は、さらに踏み込んで、地域の歴史や住民の生活そのものがアートとして表現される可能性を探っているように見える。

映像の作家ということでは、石田尚志が 2007 年に滞在制作を行うなど縁の深い横浜美術館で個展を開催、エントランスホールも用いたスケールの

大きさとアニメーションからドキュメントまで様々な表現形式を行き来する軌跡が印象に残った。線や色や光が生成し、消滅していく様相を、特に近年では作家の身体の動きと共に作品化しており、エネルギーの大きさに圧倒される内容である。

宇都宮美術館の「パウル・クレー だれにもないしょ。」は、この美術館が開館以来クレーのコレクションに力を入れてきた活動を反映して、ベルンのパウル・クレー・センターと遺族の全面的な協力を得て 31 点の日本初公開作品を含む、110 点から成る展覧会である。ファンの多い作家であるが、実は理解の難しい作家に対して、作品制作の意図に迫るべく幾つかのキーワードを設定し、実際に作品を並べて共通性やバリエーションを提示しながら謎を解き明かす試みがなされる。ドイツや東欧圏の美術・デザインの展示の実績を誇る宇都宮美術館において、じっくり重ねてきたクレー研究の上に実現した企画なのだろうと感じられた。

もう一つ、埼玉県立近代美術館で開催された「すごいぞ、これは!」展を取り上げたい。これは文化庁、心揺さぶるアート事業実行委員会と巡回する 4 会場を主催者とする、平成 26 年度に実施した「障害者の優れたアート作品」についての調査を基準に、全国の美術館学芸員等が推薦する 12 名の作品を紹介するものである。新しい表現が生まれると分

類し意味づけて「美術表現」の体系にとりこんでしまいがちな美術館にとって、作品として見る、という枠組みにあてはまらない日常行為の軌跡、あるいは心の叫びが感じられる展示である。シンプルな展示が作品の力をより引き出していた。

最後に、群馬県立近代美術館の「戦後日本美術の出発 1945-1955―画家たちは『自由』をどう表現したか―」についても振り返ってみたい。これは本年が日本の敗戦後 70 周年にあたることももちろんだが、1977 年に東京都美術館で開催され、敗戦から講和条約締結頃までに焦点を当てた「燦光・松本竣介そして戦後美術の出発」をひとつの基準にして構想されたものである。戦後美術とは、すなわち昨日までの戦争を激しく問う時代をうつす美術であり、その点では、節目の年を記念して日本各地で行われた戦争と美術の関係を問う展覧会と重なる部分が多い。そのいっぽうで 1945 年から 55 年に絞ったため、出品作品の多くは「戦後」という、敗戦が導き出したものとはいえ、戦時とは異質な占領下の社会の混乱や矛盾を色濃く反映している。10 月 31 日からは栃木県立美術館にて栃木県出身画家や女性画家を軸にする「戦後 70 年：もうひとつの 1940 年代美術」が開催される。重ねて美術館で日本の「戦争と美術」をふりかえる機会となることだろう。



宇都宮美術館「パウル・クレー だれにもないしょ。」会場風景 (写真提供:宇都宮美術館)

東京で見えてきたいくつかのこと

遠藤 望(えんどうのぞみ・世田谷美術館)



東京では、水面下で2020年の「オリンピック・パラリンピック文化プロジェクト」への参画が始動していると思われるなか、2015年度前半にも魅力的な企画展が多数行われた。以下、圏外での事例にも触れさせていただきつつ、いくつかのトピックをもってご報告としたい。

引きも切らずメディア共催海外著名美術館大規模展が続いている。「ルーヴル美術館展」(国立新美術館、2月21日～6月1日)、「大英博物館展」(東京都美術館、4月18日～6月28日)、「プラド美術館展」(三菱一号館美術館、10月10日～2016年1月31日)ほか。“館展もの”と称したいこうした企画も、館の知名度だけで集客が期待できる時代はすでに終わり、企画内容勝負となってきたが、それにもかなり「疲れ」がほの見えるように思われるのだからいかなものだろう。そのなか「ダブル・インパクト—明治ニッポンの美」展(4月4日～5月17日)は、岡倉天心を縁に強力な共同研究体制を組めたボストン美術館と東京藝術大学大学美術館の優れた企画に納得させられた。

一方、施設設備の物理的な事情による改修あるいはリニューアルを機に、美術館のアイデンティティーに立ち戻る企画も目を引いた。日本の美術館界を切り開いてきた神奈川県立近代美術館鎌倉館の閉館に向かう三部作「鎌倉から始まった1951—2016」展を象徴的な企画とするなら、市内でもブリヂストン美術館「ベスト・オブ・ザ・ベスト」展が5月に終了、数年におよぶ休館にはいった。改

修休館を終えて再開館した東京都庭園美術館では「アール・デコの邸宅美術館」展(7月18日～9月23日)により、歴史的建築としての自館を丁寧に検証し、ふだん見られないディテールに改めてその魅力を堪能させてくれた。町田市立国際版画美術館の「ベスト・セレクション」展(10月31日～11月23日)もそうした一つ。ここ数年開館20周年、30周年という節目を迎える美術館も多く、こうした場合に収蔵品に立ち返る企画がなされるのも当然の成り行きである。年月を積み重ねて集積した作品によって、学芸員が自館の独自性を検証し、今後の軌道修正をはかることの意義は大きいと思う。収蔵庫に眠っているふだん目の目を見ない作品を広々とした展示空間へ出してやること、そこに学芸員としての喜びもあるのではなかろうか。美術館における世代交代が現実のものとして迫っているのであればなおのこと、こうした機会に有形無形の継承を行うことは重要であろう。

さて、戦後70年の今年、東京でも「戦争」「戦後」がさまざまな形で取り上げられた。東京国立近代美術館「MOMATコレクション特集：誰がためにたたかう？」(5月26日～9月13日)「同：藤田嗣治、全所蔵作品展示。」(9月19日～12月13日)、東京都現代美術館「MOTコレクション 戦後美術クローズアップ」(7月18日～10月12日)、板橋区立美術館「近代日本の社会と絵画—戦争の表象」展(4月11日～6月7日)、太田記念美術館「浮世絵の戦争画—国芳・芳年・清親」(7月1日～

7月26日)など。

昨今、マンガやアニメといったサブカルチャー系企画も珍しくはなくなった。「スター・ウォーズ展」「機動戦士ガンダム展」などでは驚かないが、国立新美術館が文化庁肝いりで企画開催した「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム展」(6月24日～8月31日)にはふれておくべきだろう。内容について云々する知見は持ち合わせないものの、出品展示や著作権ほか相当の難事業であったことは想像に難くない。同展は国内のみならず、アジア、欧米圏への国際巡回も視野にいられていると聞く。ともあれメディア・アートは今後、美術、美術館に確実にかわっていくことになるだろう。日本科学未来館「チームラボ 踊る!アート展と、学ぶ!未来の遊園地」展(2014年11月29日～2015年5月10日)の展示にも注目しておきたい。

最後に、今年いよいよ表立ってきたと感じる「アール・ブリュット」について。2010年パリで開催された「アール・ブリュット・ジャポネ」展が大きな反響を呼び、里帰り展が国内7会場を巡回、さらに文化庁、厚生労働省がそろって障害者芸術支援事業を打ち出して以降、様々な動きが活発化している。いわゆる芸術の枠外で制作してきた人々への注目は、従来アウトサイダー・アートと呼ばれてき

たが、ここきて「アール・ブリュット」という呼称が表立つようになった。冒頭に「オリンピック・パラリンピック文化プロジェクト」と書いたが、東京都は2020年を見据えた「東京文化ビジョンの文化戦略を実現する10の主要プロジェクト」の中に、障害者アートプロジェクトを位置づけ、「アール・ブリュット」発表の場を現代美術館に設置すると表明している。言わずもがな、反文化主義の提唱者ジャン・デュビュッフエの提示したArt Brutは、「障害者アート」ではなく、その支援を意図したものでなかったが、日本においてこしはアール・ブリュット＝障害者アート支援活動というように概念化されていくだろう。関西圏では年月をかけてこの活動が育ちつつあり、専門美術館もある。品川区はアール・ブリュット美術館併設の施設整備計画を発表し、しながわ水族館で「アール・ブリュット」展(9月16日～10月12日)を開催。東京圏外ながら学芸および美術関係者の責任推薦方式による埼玉県立近代美術館「すごいぞ、これは!」展(9月19日～11月3日)は見ごたえある企画だった。一方、アーツ千代田3331では障害の有無を問わずに参加を呼びかける「ボコラート全国公募展」(6月25日～7月20日)が第5回を迎えていることも付け加えておきたい。



「アール・デコの邸宅美術館」展(東京都庭園美術館) 展示風景

日本の美は北陸にあり !?

二木裕子 (ふたぎ ひろこ・小松市立宮本三郎美術館)



3月14日の北陸新幹線開業から半年以上たち、地元金沢駅は乗降客が飛躍的に増え、街中の宿泊施設や飲食店が飽和状態となり、その不満がちらちらと耳に届く。観光客が増えすぎて地元民が寄り付かなくなったとか、一時だけの利益を求めて参入してくる事業者の話とか。土日に出かけると駐車場を探すのも一苦勞。急激な人の流入で町のありようがこんなにも変わるのだと実感している。

さて、新幹線の出発駅にある東京ステーションギャラリーでは、開業記念として3本の展覧会が組まれた。最初に「ピカソと20世紀美術」(3月21日～5月17日 34,977人)、次に「没後30年 鴨居玲展 踊り候え」(5月30日～7月20日 43,750人)、最後に九谷焼開窯360周年を記念し「交流するやきもの 九谷焼の系譜と展開」展(8月1日～9月6日 17,953人)が開かれた。石川県の南加賀3市(能美市・小松市・加賀市)の美術館・博物館が協力し、名品110点が展示された。この展覧会に合わせて、地元九谷作家を取り上げるデパート展も行なわれたと聞く。新幹線効果を逆手に取ったような格好である。

一方、私の住む市にある「小松空港」は、新幹線の影響で搭乗者数の減少が報じられている。空港では石川より福井からの集客を狙い動く恐竜が設置され、福井駅前には、新幹線伸延をにらんでジュラシック・パークが出現。福井の恐竜押しが少々気になるのだが、この秋は福井県立美術館で「大永平寺展」(10月2日～11月8日)が開かれ、

鎌倉時代からの貴重な禅の文化財が公開されている。

こうしたにぎわいの狭間で当館は「宮本三郎記念デッサン大賞展」(9月19日～11月3日)を開催した。小松市が、デッサンの名手として知られる出身洋画家・宮本三郎の名を冠した公募展を始めたのは2011年のことである。当初はデッサンに特化した全国でも珍しい公募展として、作品が集まるのかとの不安のなか手探りで始まった。ビエンナーレで開催し3回目となる今回は476人753点の応募があり、前回より25%も増加した。首都圏(東京・千葉・埼玉・神奈川)からの応募者数は20%増である。その要因として、やはり新幹線開業で注目された事も影響しているのではないかと思う。この展覧会は世田谷美術館分館宮本三郎記念美術館でも東京巡回展を開催している。これまで基礎的な造形教育の一部として考えられてきた「デッサン」や「ドローイング」。「明日の表現を拓く」と謳うこの公募展を通じて、あらたな表現行為の一分野として捉えなおされる機会となればと考えている。

北陸の公募展の老舗として富山県立近代美術館の「第11回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2015」(9月19日～11月23日)がある。ポスターデザインの今を紹介する国際的な展覧会として1985年に始まり、3年毎に開催され創設から30年目という。今回は世界57の国と地域から3,845点の応募があった。公募展に関しては駆け出し者の筆者としては、立ち上げの頃が気になるもの。

第1回展に寄せられた文には「日本のほとんどの美術館が、純粋美術偏向で、ポスターに対する正当な認識を持っていない」「画家や建築家を上位にみて、デザイナーを二段も三段も下に見ているという風潮」を嘆き、この公募展が「日本のグラフィック・デザインの格質の向上に大きく作用する」事を期待する旨が述べられている。現在では、世界5大ポスター展に数えられるほどに成長し、ポスターデザイン自体も美術界の一翼を担うものとなっている。会場に並べられた多彩な表現とメッセージ性に富んだ作品群。マンネリの批判もあると聞けるが、30年にわたる継続が築き上げた一種の重みが伝わってくる気がした。

この富山県立近代美術館で、先の東京オリンピックでポスターデザインをてがげた亀倉雄策の作品《ヒロシマ・アピールズ》を久しぶりに見た。小松市で最晩年の氏が展示に立ち会われ「亀倉雄策展」が行なわれたことを思い出す。その作品の中で、燃える蝶のポスターが心に強く残った。この亀倉

氏は新潟県の出身という。保守的な北信越地域にあって、こうした意欲的な公募展が、一時の勢いだけで終わることなく、息ながく続いてゆくことで、将来、第二の宮本三郎、亀倉雄策が生まれることに繋がってゆけば…と密かに願っている。

これまでは、首都圏からちょっと遠い場所だった「北陸」。冬のどんよりとした空とふりしきる雪、伝統ある町並み、色彩にあふれる器とおいしい料理など、美術品だけでなく、そこに息づく「美」はある種の憧れをもって見られていた気がする。今回の開業により、その距離はぐっと縮まった。そういえば、開業時のキャッチコピーは「日本の美は北陸にあり」だったはず。美術館は、こうした本物の「美」を魅せる殿堂としての役割を果たせているだろうか。地域で培われた「美」の掘り起こしと発信を地道にこなっているか。都会からの「美」の一方通行となっていないか。この狂騒後、北信越の美術館がどう生き残るか、その真価が問われている…そんな気がするのだが。



小松市立宮本三郎美術館
「宮本三郎記念デッサン大賞展」広報チラシ



富山県立近代美術館
「第11回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2015」広報チラシ

思いのままに、展覧会そぞろ歩き

坪井則子 (つばい のりこ・佐野美術館)

東海ブロックで今年度上半期に開催された展覧会からいくつか取り上げたいと思う。とはいえ、なかなか東海全県に限らず足を運ぶことができず、興味があっても見逃した展覧会もあって、偏りのある話になることをお許しいただきたい。

愛知県美術館では、8月7日から10月4日まで「芸術植物園」という興味深いタイトルの企画展が開催された。副題に BETWEEN BOTANY AND ART とある。古来植物は多くの美術作品に作られてきたが、それは単に草花をモチーフとして捉えたというよりも、生命体としての植物への探求心が根本にあるのではないか。こういった企画は、個々の作品から発せられるメッセージを再構築し、観客自らひとつのストーリーを感じ取らなければならない。ある意味観客への信頼があってこそ成り立つ展示である。「芸術植物園」に足を踏み入れた人々が、そこかしこに立ち止まり、各々の展示ストーリーを描こうとしている姿を見て、あらためて同館の優れた企画力と思った。

同館では、4月17日から5月31日まで「月映」展が開催されていた。個人的には大変興味を持っていたのだが諸般の事情で足を運べなかった。秋になって巡回先である東京のステーションギャラリーにてやっと拝見することができたのだが、愛知県美術館ではまた違った印象の展示になったかと思うと何えなかったのは申し訳なくまた残念であった。本展は、1914年からわずか1年の間に若き美術学生田中恭吉、藤森静雄、恩地孝四郎によっ

て生み出された木版詩画集『月映』を紹介したもので、公刊『月映』の準備期間に制作された私家版を含む貴重な資料が展示された。心の深奥を表現して余りある静謐な画面、独自の抽象表現による新しい芸術、若い作家たちの文字通り命を削って生み出した珠玉の作品を知るまたとない機会であり、同展の図録のデザインもその世界観をとらえて素晴らしい。

さて、この原稿を書いている現在、私の勤める佐野美術館では三島市在住の絵本作家「宮西達也ワンダーランド展」(10月3日～11月23日)を開催中である。絵本は子供だけのものではない。人生の様々な時点で、その時々抱いて鑑賞することができる、実に懐の深い芸術である、と最近特に感じるようになった。また、絵本を自分の子供に読み聞かせるような世代の観客は、子育てに追われて美術館から足を遠のきがちであるが、そういった人々が美術館に足を運ぶきっかけにもなるだろう。刈谷市美術館で開催された、生命の神秘や物の形を精緻な描線で描き尽したイタリアの絵本作家イエラ・マリの展覧会、「イエラ・マリ展 字のない絵本の世界」(7月18日～8月30日)、下半期にかかるが静岡市美術館での「絵本をひらくと ちひろ美術館 世界の絵本原画コレクション展」(10月10日～11月23日)などは、新しい人たちに絵本を通じて美術館への扉を開くまたとないチャンスになったことだろう。

その他に興味深い展覧会をいくつかあげると、メ

ナード美術館では、桃山陶芸を追求し独自の力強い造形を生み出した同県出身の鈴木五郎の展覧会「鈴木五郎 土に生きる 土に遊ぶ」(7月24日～9月23日)が開催された。

また静岡県立美術館では「富士山 信仰と芸術」展が山梨県と共同で開催された(9月5日～10月12日)。富士山が世界文化遺産に登録されて2年、満を持しての富士山展である。富士山を描いた芸術作品が信仰抜きに存在し得なかったことをあらためて納得させられた展覧会であった。同展は山梨県立博物館へ巡回された。

「青磁の今一受け継がれた技と美 南宋から現代まで」(静岡市美術館 6月13日～8月16日)では、古来の名品と現代作家による作品を展示、青磁表現の奥深さと新たな可能性とが感じられる好企画となった。

ベルナール・ビュフェ美術館では、その思想が「シュタイナー教育」として知られるルドルフ・シュタイナーを取り上げ、混沌とする現代社会への提唱として捉えた展覧会を開催、子供と美術との出会いを標榜する同館ならではの企画となった(「ルドルフ・シュタイナーからのメッセージ」7月4日～10月13日)。

三重県立美術館では「空飛ぶ美術館」(3月7日～5月6日)、「真昼の夢、夜の寝覚め一昼夜逆転の想像力」(5月16日～6月28日)が開催されたが、残念ながら未見である。

ところで先の「芸術植物園」展もそうだが、展覧会タイトルの重要性をあらためて考えさせられる。世の中にあふれる膨大な展覧会の中で、多くの人々に足を運んでもらえるのは、企画内容とともにそれを端的かつ衝撃的に(?)表す画期的なタイトルなのだ。



愛知県美術館「芸術植物園」展広報チラシ



刈谷市美術館「イエラ・マリ」展広報チラシ

コレクション展に思う

岸野裕人 (きしの ひろと・姫路市立美術館)



今期も近畿ブロックにおいてはかなりの数の展覧会が開催された。管見ではあるが、その中で目に留まった比較的規模の大きなものを挙げてみたい。

まず、前号でも紹介のあった「バーネット・ニューマン 十字架の道行」(MIHO MUSEUM、3月14日～6月7日)は、「曾我蕭白『富士三保図屏風』と日本美術の愉悦」展との同時開催で、しかも訪れた日が最終日に近かったせいか予想を超えた人の多さに驚かされた。梅雨に入って京都市美術館では「ルーヴル美術館展 日常を描く一風俗画にみるヨーロッパ絵画の真髄」(6月16日～9月27日)、「マグリット展」(7月11日～10月12日)と東京発の2展が続き、秋になってからは京都国立博物館、京都国立近代美術館、細見美術館などで“琳派400年記念祭”に因む企画展が一気にはじまり都を彩った。また、大阪では国立国際美術館の「高松次郎 制作の軌跡」(4月7日～7月5日)、大阪市立美術館での「伝説の画家たち 二科100年展」(9月12日～11月1日)、神戸では兵庫県立美術館での「堀文子【一所不住・旅】展」(4月18日～6月7日)、「パウル・クレー だれにもないしょ。」(9月19日～11月23日)、神戸市立博物館「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—」(9月20日～2016年1月11日)が目についた。多様さにおいても、各々の内容においても手応えを感じさせる半期であったと思う。

ところで、本欄でも多くの方々が言及されてき

たことと思うが、各地の美術館でコレクションを活用した展覧会が目につくようになって久しい。他所からの借用による企画展を開催するにあたっては財政的な事情が絡むのは承知のことだが、これらのコレクション展が長く「企画展」、「常設展」という2種類に大別されてきた枠から抜け出して、新たな展開を示しはじめていることに注目したい。経費的な問題から発生した苦肉の策だというだけなら、これほど各所で継続し個性的に展開することもないだろう。僅か30年ほども遡れば、「集客のためには目玉作品が要る」といわれ、「常設展」や「館蔵品展」という名称が入場者の少ない展覧会の代名詞のように使われていた時代があった。ただ、そうした声も徐々に聞こえなくなってきた。おそらく各館の収集資料の充実とその調査の深まりがこうした声を排除してきたのだろう。確かに収集資料を源とした美術館からのメッセージの広がり、利用者の選択肢を増やし、垣根を取り払い双方の距離を縮めることにつながってきている。

かつて“カマキン方式”と呼ばれ多くの後発美術館が倣い馴染んできた展覧会の在り方も、あたかも鎌倉館の閉館が暗示するかのようになろうとしている。おそらく、神奈川県立近代美術館の貴重な足跡からわれわれが学び取ることは多いはずである。コレクションの充実を図ることは容易ではないが、収集活動は終わりのない作業でもあることを自覚し、長期的な展望を持って根気よく続けるしか術はない。鎌倉からはじまった日本の公立美術

館の歴史は、未だ70年に満たない。ようやく、それぞれの美術館が、それぞれの地域で社会的な立場を確立し、それぞれの特質を自覚して役割を果たす時が来たようだ。

そんなことを考えさせられたのが和歌山県立近代美術館の「保田龍門 保田春彦展」(5月26日～7月5日)や滋賀県立近代美術館での「魅力再発見!“秘蔵”コレクションとの遭遇」(6月13日～7月20日)、兵庫県立美術館「VS—コレクション新旧対決」(7月18日～11月8日)などのコレクション展であった。いずれも出品作品のほとんどが収蔵品で構成され、各館の所在する地域や収集方針に関わりを持つ作家や作品を中心にした展覧会である。各担当者にとっては、収集の過程や状況まで承知しながら、日常的に交わることができる資料や作家を相手に、最高の贅沢ができる場でもあったに違いない。

筆者が所属する姫路市立美術館では年に5本を目途に企画展を開催しているが、例年、その内

の1本はコレクションを軸に構成する。今年度は「懐かしい風景」(8月8日～10月4日)と題し、昭和という時代を地元の風物を対象にした絵画や写真で振り返った。一部の展示物は地元の所蔵家や作家から借用して内容の拡大を図ったが、それは新たな協力関係を築くことにもつながっている。残念ながら入場者は多くはなかったが、会場で開いた子供ギャラリーツアーやギャラリートークでは参加者同士の対話が自然にはじまり、横道に逸れながらもコレクションを前に共通の視線をもった和やかなひと時を体験できた。

ギャラリートークに参加しながら、どのような美術館が期待されているのか、それを知るためにはこの土地と人を知る必要があることを今さらながらに感じたしである。これらを知らずして種を蒔いたとしても収穫は少ないだろう。いくつかの大規模展とコレクション展を振り返りつつ思い至ったことである。



姫路市立美術館「懐かしい風景」展／子供ギャラリーツアー(8月26日)



同展／ギャラリートーク(9月26日)

被爆 70 周年事業と上半期の活動

福永 治 (ふくなが おさむ・広島市現代美術館)

前回の中国ブロックのテーマが巡回展で、この地方は巡回展で溢れているという、揶揄を含んだものだったが、私はそれが中国地方特有の現象だとは思っていない。巡回展の中にも、この地方の美術館が中心となって企画したもの、積極的に関与したものがあ、各館はむしろ地道に展覧会を作る努力を続けている。今回はその経緯も踏まえ、積極的な取り組みを感じた展覧会を紹介したい。

今年は戦後 70 年の区切りにあたり、各地で戦争、あるいは戦中・戦後の歩みをテーマとした展覧会が行われた。広島はまた被爆 70 年の節目であり、日頃の認識を問われる年となった。広島県立美術館は、長崎県美術館と共同で「戦争と平和展」(7月25日～9月13日)を開催した。両館の関連コレクションの厚みを感じずる機会となったが、テーマはまさに直球、しかし対象がナポレオン戦争から現在までの 200 年に及び、やや散漫な展示となったことが悔やまれる。泉美術館(広島市)は、「ヒロシマ 70 入野忠芳・香川龍介・田谷行平」(6月4日～7月12日)、「復興の記憶・ヒロシマを見つめた写真家たち」(7月16日～9月6日)両展を開催し、前者は被爆経験のある画家 3 名の取り組みを、また後者は原爆の惨状から復興まで、戦後を生き抜いてきた人々の姿を伝えるもので、意欲的な活動を続ける同館に相応しい展覧会だった。また我が広島市現代美術館は、「ヒロシマを見つめる三部作」として、被爆の過去を振り返り、復興の軌跡を見つめ、今、これからを考える、三つの異

なる視点の展覧会を企画した。第一部「ライフ=ワーク」展(7月18日～9月27日)は、被爆者が描いた「原爆の絵」を出発点に、体験や生活に根差した美術の有り様を紹介した。現在は第二部「俯瞰の世界図」展(10月10日～12月6日)を開催中で、俯瞰の視点が、過去や現在を客観的に捉えると同時に、進むべき道を示唆してくれることに着目した。またオープンプログラムとして、「原爆—ひろしまの図 公開修復」(7月18日～9月27日)を実施した。吉備国際大学の協力により、丸木位里・俊夫妻の絵画を公開修復し、普段はあまり目にするこのない作品の保存事業について紹介した。一方、笠岡市立竹喬美術館の「画学生 小野春夫と父 竹喬」展(7月18日～9月6日)は、大戦で戦死した小野竹喬の長男、春夫(1917-43)が残した作品や資料を調査し、道半ばで途絶えた画業を辿ると共に、同時代の父の作品を通して、親子の情や心境をも伝える好企画だった。

現代美術でも意欲的な展覧会が目立った。まずは島根県立石見美術館での「澄川喜一 シンプル・イズ・ビューティフル」展(7月11日～8月31日)である。同館を含む「グラントワ」のセンター長を務める澄川さんの、研ぎ澄まされた作品による構成は 10 周年事業に相応しいものだった。作家自身が体験しインスピレーションを得た郷里の風土や、ものづくりへの敬意が、若い人たちに引き継がれることに期待したい。近代日本美術のコレクションで知られるウッドワン美術館(廿日市市)は、初

の現代美術展となる「吉村芳生—鉛筆で刻む生命のキセキ—」(3月21日～5月10日)に取り組んだ。鉛筆による細密な表現を得意とした吉村の、写真や新聞を描写した初期から、後半生の自然をテーマとする作品まで、その魅力を余すことなく伝えるものだった。この異色の企画は評判となり、多くの人で賑わった。さらに岡山県立美術館では「有為自然—岡崎和郎、伊勢崎淳、中西夏之 すべてとつながり、場が生まれ、ともに生きる」と題した展覧会(4月28日～6月7日)が開催された。共に岡山に関係する 3 作家(中西は倉敷芸術科学大学で教鞭をとった)は若い頃から交流があり、刺激を与え合う存在だったという。しかし、分野もテーマも違う組み合わせは少々複雑で、難解なイメージを拭い去ることが出来なかった。むしろ作家たちの健在ぶりを確認した展覧会であった。

古美術の展覧会からは、奥田元宋・小由女美術館(三次市)で開催された「没後 400 年 古田織部展」(3月2日～4月12日)を取り上げたい。村上勇館長による企画で、3 会場を巡回した。昨年

岐阜県現代陶芸美術館で開催された「大織部展」が、名品を網羅したものだったのに対し、指定物件揃いではなかったが、これまでの経験と確かな目、高い見識で選ばれた 170 余点によって織部の世界を展覧する秀逸な展覧会だった。一方、ひろしま美術館では「毛利家の国宝・至宝」展(4月25日～5月31日)が開催され、雪舟の「山水長巻」の正本、副本の全巻が展示される、またとない機会となった。

今回は、ごく限られた見聞による紹介となったが、2015 年度上期は他の分野も含め充実した展覧が多かった。唐突で恐縮だが、私は、地域の中で美術館が生き残っていくためには、それぞれの役割に徹すべきだと思っている。つまり、各館の持ち味を生かして活動することが大切だと考えるのである。私は、上期の各館の展覧会を検証して、改めて地域の力を頼もしく思った。そのような取り組みを続けることで美術に親しむ人を増やし、美術館を応援してくれる人を掴んでいけるのではないかと、未来は決して暗くないことを感じる作業であった。



「ライフ=ワーク」会場風景 広島市現代美術館
撮影：内田和宏(ライフマーケット)



《原爆—ひろしまの図》公開修復の模様 広島市現代美術館

コレクション展のあれこれと、これから

太田恵美子（おおた えみこ・高知県立美術館）

美術館の所蔵作品（コレクション）は、収集方針によって館の独自性を形成し、展覧会（コレクション展）を通じた公開や活用への取り組みは、館によって多種多様である。地域の財産を誰にどうみせるのか、作品の魅力を掘り下げ伝える内容には、館の現状や企画者の熱意と手腕が現れ、一過性の強い特別展よりも特別な魅力を感じる。執筆者は、所属する高知県立美術館の二大コレクションのひとつ、石元泰博コレクション展を担当した際、それを実感することとなった。本稿執筆の機会を得た今回、四国内の美術館では、当館含め収蔵品を活用した展覧会が複数開催されていた。そのいくつかの方向性や特徴を紹介することとしたい。

高知県立美術館では、所蔵品全 41,747 点のうち、マルク・シャガールの油彩画、版画からなる約 1,200 点のコレクションと、高知ゆかりの写真家・石元泰博のオリジナル・プリント 35,000 枚を含む膨大なコレクションを二大コレクションと位置づけている。それぞれ専用の展示室を有し、シャガール展示室は開館以来、石元展示室は 2014 年以來、それぞれ年間平均 6 回の展示替えを行いながら通年で作品に親しめる環境を整えている。しかし点数の多さには、展示替えのテーマには困らない利点がある一方、いつでも見られる収蔵品というイメージが定着し、来館者の足が遠くの難点もある。常に調査・研究の最前線を見せられるよう緊張感を持つとともに、石元コレクションの普及については、石元氏ゆかりの地、土佐市内の小学校と共同したスクール・プロ

グラムにも取り組んでいる。

このような、一人の作家のコレクションを核に企画された展覧会として、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館では、「猪熊弦一郎展 みんなで伝える、好きになる」（10 月 3 日～12 月 6 日）が開催された。本展では、同館の開館記念展の際に猪熊氏自らを選んだ作品を中心に紹介しており、展示室内を歩んで行くにつれ、変遷してゆく作家の画業を楽しむことができる。一方で、全国から集められた作品への感想やエピソード、猪熊氏の言葉が記された鑑賞ツールを展示室内のボックスからピックアップし、それぞれの猪熊像を共有しつつ鑑賞できるという仕組みだった。その場にいる自分同様、猪熊氏に魅せられた誰かとも共に、「みんなで」楽しむことができ、開館以来、猪熊氏を作品や資料を交えて立体的に紹介し続けてきた同館の集大成とも言える展覧会となっていた。

集大成、と言えば、徳島県立近代美術館で開催された「開館 25 周年記念 人間表現を楽しむ 25 のとびら展」（10 月 3 日～2016 年 1 月 11 日）も同様である。同館では「人間表現」を収集方針のひとつに掲げている。その方針のもと収集された、人間像や人物表現の作品をこれまでに紹介してきた成果を踏まえ、本展では、選りすぐった 100 点の人間表現の作品を、25 の鑑賞のヒントとなる「とびら」でまとめている。「とびら」は例えば、「おもかげ」や「動作」「リズム・色彩・音楽」のような抽象的な言葉、「誰？」や「見る・見られる」「どこから見る？」など、

来場者が作品に親しむきっかけとなる。作品を鑑賞すること、どう感じどう思うかは、企画者の意図がどうであれ、作品を鑑賞する側にゆだねられる。「とびら」は、来場者それぞれの鑑賞の可能性を拡げるための配慮であり、この他にも、小学生向けや手話通訳付きの展示解説、視覚障がい者とともにつくる美術鑑賞や、収蔵作家によるワークショップなど、誰もが展覧会を楽しめる催しが企画されていた。これも館の収蔵品の熟知と、不特定多数の来館者への意識が展覧会のあり方を決める、コレクション展の特徴ではないだろうか。

最後に、特定の来場者に向けたコレクション展として、愛媛県美術館で開催されたコレクション展「What's going on in this picture? どこから思う？ 小学生のための美術鑑賞」（10 月 2 日～11 月 13 日）を紹介したい。本展では、小学生でもイメージしやすい動物や家族など、生活に身近なテーマで

選ばれた収蔵品が並んだ。作品をよく見ること、見つけたことを話すこと、どうしてそう思ったのか考えること、自分の意見を他者と共有することを学びながら、気がつけば作品をじっくり見ている、そのように仕掛けられていた。学年ごとに分けられたワークシートを見つつ、より作品に親しんでもらおうと、あれこれと小学生向けにワークシートを考案するものの、問いかけの内容はもっとシンプルで良いのではないか、問いかけた内容に対する答えを、丁寧に掘り下げることが重要ではないかと感じた。

繰り返しになるが、収蔵作品にこそ館の方針や理念が宿り、その活用には学芸員の力量が表される。各館のコレクションの活用の様々を見て、改めてそう感じた。20 年来のシャガール・コレクションと、これから普及に努める石元泰博コレクション。さて、高知県美ではどうするか、これからの使命に思いを馳せる秋となった。



石元泰博展示室を訪れた石元氏母校の児童たち

戦争と近代、そしてリニューアル

秋山沙也子（あきやま さやこ・佐賀県立美術館）

戦後 70 年を迎えた 2015 年は、奇しくも安保関連法案にかかわる一連の流れとそこに飛び交う言説によって、過ぎ去った時代を否応なく意識せざるを得ない年となった。その熱の反動か、一気に秋めいた九州では、広島県立美術館と長崎県美術館の共同企画展「戦争と平和」（長崎県美術館、9 月 20 日～10 月 25 日）が静かな存在感を放った。二館の所蔵品を核として、ナポレオン戦争から二度の世界大戦、そして現代に至るまでの戦争に言及した多彩な作品を集めている。

恥ずかしながら、戦争と美術の関係という、どの作家が体制に協力したか、そうでなかったかという漠然とした知識以上のイメージが薄かったのだが、芸術家として生き抜くための作家たちのしたたかな戦略の数々、あるいは単純な二項対立では語れない葛藤と抵抗があったことを、今回の出展作品を通じて感じることができた。作品の裏に見え隠れする、当時の人々すべてにのしかかっていた戦時中の空気が肌に迫る。言葉による説明を最小限に抑え、作品の多声性を際立たせた展覧会であった。

宮崎の都城市立美術館では「日韓近代美術家のまなざし—『朝鮮』で描く」（10 月 23 日～12 月 6 日）が開催中である。20 世紀前半の日本と韓国の作家の交流に焦点を当てた展覧会だ。昨年の「官展にみる近代美術」（福岡アジア美術館が起点となった）と同じく巡回展だが、かねてより朝鮮半島と正負を含めた多様な交流がある九州で本展が開催される

ことは、大きな意味があるように思う。

戦争期の美術に関する展覧会のラインナップの豊富さは、ここ数年、帝国の時代から高度成長期まで「近代」を振り返る企画が続々と開催されていることも無縁ではないだろう。なかでも今回の二展覧会は十分な評価がなされていない作家を含め、作品研究を積み「近代」の新たな一面を照射した、まさに美術館だからこそできたアプローチだといえる。国のあり方、人の流れがふたたび動き始めた今、表現を通じて時代を見据える新たな“目”が必要とされているのかもしれない。

ちなみに、長崎県美術館に足を運んだ日に「戦争と平和」展と同時開催中であったのは、ひとつのファッション・ブランドの軌跡を追った「1∞ ミナカケル—ミナ ペルホネンの今までとこれから」（10 月 10 日～12 月 6 日）。工房から抜け出した布や素材が縦横無尽に展示室を覆い、ダイナミックな空間をつくり出すさまはまさに爽快だ。布に転がって遊ぶ親子連れを見ながら、いったいどのくらい緊密な打ち合わせの積み重ねから、この軽やかな展示空間が生まれたのだろうと考えてしまった。

さて、当館の最近の動向もご報告したい。改修のため昨年より休館していた当館は、満を持して 7 月にリニューアル・オープンした。館内には佐賀県生まれの岡田三郎助を顕彰する記念室を新設。ささやかなスペースではあるが、日本近代洋画を中心に、館蔵品を系統的に紹介する体制を徐々に整えつつある。

こけら落とし展には、デザインとアートの世界で幅広い活躍を見せる吉岡徳仁を迎えた。吉岡は、雪、雲、氷などの自然界の現象から着想した独自のものづくりに挑んでおり、一連のリニューアルでも展示室の内装デザインを含め、全面的な協力を得た。九州初の個展ともなった今回の「吉岡徳仁展—トルネード」（7 月 20 日～8 月 20 日）は、「美術館やアートになじみの薄い人々にも体感的に楽しんでもらいたい」という佐賀生まれの吉岡の意向により、2012 年に東京都現代美術館でも披露されたインスタレーション「TORNADO」を核として構成され、神秘的な白の空間が展示室に広がった。

同展の会場で驚かされたのは、若い人の多さである。事実、アンケート記入者の半数が 30 代以下の来館者と、作家のもくろみ通りこれまでと違う客層の方々が多く美術館を訪れたことは、関係者の大きな喜びとなった。力のある作品を先取り的に紹介し、地域の感性を刺激することは、文化拠点に乏しい地方の美術館にとって、今後さらに重要

な役割となるだろう。これからも名品や文化財とともに同時代の多彩な表現を幅広く紹介する、懐の深い美術館でありたいと思う。

当館に限らず、九州地区の館は施設維持の節目にあるようで、北九州市立美術館がこの秋から長期休館に入ったほか、改修工事中の門司の出光美術館も外部に臨時展示室を設けて運営が続けている。来年以降も福岡市美術館のリニューアル工事などが控え、各館はソフト・ハード両面での充電期に入ったようだ。節目と言えもうひとつ、CCA 北九州（福岡県北九州市）の移転も個人的に印象深い出来事であった。現代アートの研究機関としては非常に珍しい地方発、それもトップダウンではなく市民活動から生まれたセンターとして、多くの人を刺激し続けてきた施設がここ九州で存在し続けていることは誇りである。以前の廃校跡を利用した建物から真新しい学研都市のビルに活動の場が移ったとき、どのような展開を見せるのか、同センターの今後に注目したい。



佐賀県立美術館「吉岡徳仁展—トルネード」展示風景



長崎県美術館「1∞ ミナカケル—ミナ ペルホネンの今までとこれから」展示風景

保存研究部会では、例年2回の会合を部会員の所属館で開催している。本稿執筆時点では今年度の会合が行われていないため（今年度第1回会合は11月13日、14日に郡山市立美術館、第2回は2月に福岡市美術館で開催予定）、ここでは本年2月12日、13日に開催した第45回（2014年度第2回）会合の報告をさせていただく。

第45回会合は、2013年に石元泰博フォトセンターが設置された高知県立美術館を会場に、写真をテーマに開催した。1日目は外部講師として、国内では数少ない写真専門の修復家である白岩洋子氏をお招きし、写真作品の構造や劣化要因、取扱いや修復事例に加え、デジタル写真の保存修復を取り巻く現状等についてご講演いただいた。近年は写真をコレクションする美術館が増えつつあり、現代美術作品と同様、その保存管理や取扱いに関するノウハウの蓄積は、多くの現場で喫緊の課題となっている。白岩氏からは、参考文献類や画像による技法の比較ができるウェブサイト、梱包資材の種類などの貴重な情報もご提供いただいた。講演後には、表面にアクリル板が貼られた作品の取扱いや修復、マウント方法や保管用資材の交換時期などについて、質疑応答や意見交換が行われた。

講義後には、高知県美スタッフの案内による館内およびバックヤードツアーが行われた。作品調査や借用返却で他館の収蔵庫に通された際、興味はあっても、保管状況をまじまじと観察したり、整理方法を探ねたりすることは恐らく憚られるだろう。当部会の会合ではほぼ毎回行われるこのツアーは、それを堂々といえる場であり、各館独自の工夫を学び、日頃の素朴な疑問や苦勞を分かち合い、自館の現状を反省（時には安心）する、大変貴重な機会となっている。今回は、昨年10月にリニューアル・オープンした石元泰博展示室やフィルム保管室を中心に見学し、オープンに至る経緯や各部屋の構造、既存施設の改修に伴う管理運営面での

問題点などの話をうかがった。

2日目は、継続協議中の「コンディション・レポート」のひな形に関して協議と意見交換を行い、主に油彩画用と立体用について部分的な修正を行った。当部会は2017年3月の学芸員研修会を担当させていただく予定であり、今後はレポートのひな形作成に加え、梱包の具体例や材料説明、劣化損傷の症例紹介など、作品借用時のコンディション・チェックに必要な情報をまとめる作業も並行して行っていく予定である。

なお、油彩画のひな形については、試験運用を始めている段階であり、部会員に限らず、なるべく多くの方にご協力をいただければと考えている。興味のある方はぜひ事務局を通じてお問い合わせいただきたい。



第45回会合（高知県立美術館）

教育普及研究部会では例年2回の会合を開催している。近年は若手学芸員の参加が目立つ一方、美術館における教育普及の歴史や第1世代や第2世代が培ってきた教育普及の根本的な理念に触れる機会がなく「何を基軸にすればよいかわからない」「活動内容に自信が持てない」と助けを求めるように参加する人もいる。部会では世代を超えた交流や幅広い意見交換を促す必要性を感じ、教育普及の草創期を知る当事者へのインタビュー企画を継続しつつ、新旧メンバーが互いの現場や活動を知り自由に討議する場を設けるよう心がけている。

今年度1回目の会合は9月14日、15日に群馬県で実施した。1日目はこの日の会場となったアーツ前橋の3つの活動コンセプト「創造的であること／みんなで共有すること／対話的であること」の成立過程とその理念について、またそれに基づいて展開されている教育普及活動の現状について、辻瑞生、小田久美子両学芸員からご発表いただいた。“共有”と“対話”は教育普及活動においてしばしば重要なキーワードになるが、館の活動の基軸に置いている例は珍しい。建設反対派だった市長や地域住民との直接対話の積み重ねから館の方向性を定めたことで、市民が「館の運営に参加している」という当事者意識を持って活動を支えているように感じられた。発表に対する質疑応答の後、紹介された地域アートプロジェクトを展開する場の1つである、前橋中央通り商店街を歩いて視察した。シャッターの下りた店が続く一角もあるが、新たな街づくりを提案するNPOの拠点や新設のギャラリースペースなども見られ、街の変化を実現することができた。

2日目は渋谷市にあるハラ ミュージアム アーク（以下、HMA）を訪問し、東京・品川にある原美術館と別館にあたるHMA、2館の設立経緯と活動理念および今後の展望などについて副館長兼主任学芸員の青野

和子氏からご発表いただいた。美術館が現代美術のプライベート・コレクションから始まったことや、設立当初からの「学術的な研究よりも現代美術の面白さを伝える美術館であれ」という館長の考え、立地の違いによる制約や求められる役割を常に分析し見直ししながら国内外の作家とのコミッション・ワークや展覧会、教育普及、独自のミュージアム・グッズ等の企画・立案を行い、それら各事業を展開するための協賛者探しまでを学芸員が担っていることなどを知った。今回見学した開架式収蔵庫はHMAのリニューアルを機に新設されたものだが、保存と展示、両方の大切さを来館者に伝えるという教育的配慮に基づいて提案した取り組みとのことであった。

2回目の会合は、2016年2月に都内での開催を予定している。教育普及の草創期インタビュー企画の第4弾を実施するとともに、部会メンバー各自の興味・関心や考え方を引き出し合い、教育普及に対する多様な考え方を共有するためのワークショップを行う予定である。



第46回会合
（アーツ前橋）



第46回会合
（ハラ ミュージアム アーク）

情報・資料 研究部会

鴨木年泰（かもぎとしやす・東京富士美術館）

情報・資料研究部会では、各館が発行・公開している収蔵品目録のリスト作成に取り組み、昨年末に『全国美術館会議会員館収蔵品目録総覧 2014』（略称「全美目録総覧 2014」）の完成を見た。

本目録総覧の狙いは、ある館のコレクションを知りたいときに、何を見れば一番網羅できるのかを知ることにある。例えば、作品目録の第2版が出て、そこに以前の掲載作品が全て含まれている場合は、該当の第2版のみを本目録総覧に収載した。全美会員館356館の900冊におよぶ本目録総覧は、全美HPトップページの右側にあるリンクバナー先のページから、エクセル版とPDF版がダウンロードできる。

公開後、ツイッターなどのSNSでも話題にのぼった。例えば「（収蔵品目録の）内容を検索できればいいのに」という声や、「収蔵品目録のない館もあるのか」といった反響である。実際、本目録総覧に収載の900冊を揃えれば、全美会員館の主な収蔵品について網羅することが可能となるが、反面「その900冊は、どこに行けば実際に見られるのだろうか？」という課題も浮かび上がった。

当部会が企画担当し、本年3月に開催された全美の学芸員研修会では、作品情報発信をめぐる課題と展望を見据えたテーマとして「美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか？/学芸員は美術情報資料をどこで入手するのか？」を掲げた。正直なところ、かなり限定的なテーマ設定だったため、どれだけの反応があるか不安があったことを告白しておきたい。しかしながら予想に反して、研修会当日は実に参加者135名を数え、会場の国立西洋美術館講堂がほぼ満席となった。

研修会では、まず国立西洋美術館の川口雅子氏より「全美目録総覧 2014」作成にいたる経緯と作業経過報告を行った。そして、三重県立美術館の田中善明氏より「事例報告/三重県立美術館のホームページ

作品情報を中心に」と、筆者より約30館のHPの最新動向について紹介。続いて広島県立美術館の福田浩子氏より「地域・人材の問題と美術情報資料へのアクセス」、東京国立近代美術館の水谷長志氏からは、「外から見る日本の美術情報資料の現在—在外日本美術資料専門家（JAL）からの提言」と題する発表があった。参加者からの質問票には、HPの運用・システムについて、高画質画像の取り扱い、また、著作権問題についての質問が寄せられた。参加者が予想以上に多かったこともあり、作品情報発信に関する関心の高まりと、この分野に関わる担当者の世代交代が進んでいるという傾向がうかがえた。

本年度の新しい取り組みとしては、作品情報発信・アートライブラリーに関する美術館の最新事例見学会を9月に実施した。今回は、学芸員研修会で事例報告を頂いた三重県立美術館を見学。美術情報公開に関する取り組みの背景や工夫などを実際に見学するとともに、参加メンバーの交流も図ることができ、有意義な開催となった。今後も最新動向について意欲的な研究活動を行い、部会のさらなる活性化を図っていきたいと考えている。



第29回
学芸員研修会風景



三重県立美術館
事例見学会

小規模館 研究部会

喜田早菜江（きた かなえ・清須市はるみ美術館）

小規模館研究部会（当初は小規模館ワーキンググループと称した）が活動を始動させて20年。発足以来、年2回の会合を積み重ねてきた。

今年度1回目の会合は、全国美術館会議（以下全美）総会翌日の5月29日に開催し、おもに今年度の研究活動内容について意見を交わした。

2回目の研修会・会合は、12月15日・16日に開催を予定している。初日に研修会、2日目に会合と視察を行う。研修会のテーマはその都度幹事館が中心となって設定しており、これまでに扱った分野は教育普及、照明、著作権、広報、収蔵庫建設、防災、地域とのつながりなど、美術館・博物館のあらゆる業務に及ぶ。今回は、「美術作品に害を及ぼす虫の発生しにくい環境づくり（IPM）について」をテーマに、有害生物の管理による文化財保護のあり方を考える機会とした。

2005年、燻蒸剤である臭化メチルがオゾン層を破壊するとして使用できなくなって以降、薬剤に依存しない虫害予防の考え方としてIPM（総合的有害生物管理）が注目され、徐々に浸透してきた。保存担当学芸員を置く余裕のない小規模館にとっても、文化財を虫の被害からいかに守るかは喫緊の課題である。誰かに音頭取りを期待するのではなく、また業者任せにするのではなく、美術館・博物館のスタッフ一人ひとりが当事者意識をもって虫害予防システムの構築に主体的に取り組む必要に迫られている。

今回、IPMを理論と実践の両面から学ぶため、講師として長屋菜津子氏（愛知県美術館主任学芸員）と川越和四氏（一般財団法人環境文化創造研究所主席研究員）をお迎えする予定である。IPMを進めるうえでの指針として、全美ではすでに保存研究部会において「学芸員による学芸員のためのむし・かび対策ノート」（以下対策ノート）が作られ、全美HP上で会員館向けに公開されている。これは、各館が位置する環

境、建物の構造、そして職員の配置状況等に応じた独自のマニュアルが作れるように構成された優れた手引きであるものの、5月の当部会会合において参加者に尋ねたところ、その存在を知っている人はわずかであった。研修会では、対策ノート作成者の一人である長屋氏にIPMの基本的な考え方を講義いただくとともに、対策ノートの活用法をご紹介いただく予定である。川越氏には、IPMにおける虫の観察やトラップ調査の重要性について、参加者が実際の虫をスケッチし討議しながら理解を深めるワークショップ形式で教えていただくことにしている。

すでにIPMを取り入れている館、あるいは今後の導入を検討している館いずれにとっても、改めてIPMの基本を学び、実践的な技術を身につけ、自館の取り組みに活かす貴重な契機となるに違いない。

今後も小規模館研究部会では、加盟館の日頃の問題意識に沿ったテーマを取り上げ、みなで学び、知恵を持ち寄り、討議し、解決の糸口をつかめるよう活動を続けていきたい。



第41回会合（郡山市立美術館）

ホームページ部会は、全国美術館会議ホームページ (以下「全美 HP」) (<http://www.zenbi.jp>) の運営にあたって、全国美術館会議事務局、パークウェア社と連携しながら活動している。現在、全美 HP の更新業務は CMS (コンテンツ・マネジメント・システム) への移行にともない事務局が担当しており、当部会では他の研究部会との連絡調整をはじめ、ホームページの運営全体に関わるサポートを行っている。

2012 年の体制変更以来、ホームページ部会では原則年 1 回の部会会合をベースとしてきたものの、やはり活動としては限定的にならざるを得ず、手つかずのまま放置されているコンテンツが目立つようになっていた。そこで 2015 年度は、オーバーホールも兼ねたホームページのメンテナンス作業に集中することとした。

まず 5 月 29 日、郡山市立美術館において第 28 回会合を開催。ホームページ全体に更新の遅れやリンク切れなどが多々見受けられるため、改めて課題の洗い出しを行うこととなった。そのほか、現在使用しているサーバ容量が上限に迫っており急ぎ容量追加が必要であること、また全美 HP における賛助会員の取り扱いに関する実現可能なアイデアについてなど、種々の意見交換を行った。

この会合における討議結果をもとに、具体的な修正作業への道筋をつけるべく、10 月 7 日には今年度 2 回目となる第 29 回会合を京都国立近代美術館にて開催することとなった。

ホームページ修正作業については、特に英語ページは 2006 年 4 月の開設以来、更新がほぼ手つかずとなっており研究部会の活動内容など現況に合わない記述が散見されることから、各部会に協力を仰いだ上で適宜原稿を差し替えること、さらにメニュー項目を見直した上で加盟館リンクの英語版を制作することを確認した。11 月上旬に CIMAM 東京大会開催を控えていることから、海外からのアクセス増加に備えてこれらの作業

に最優先で取り組むこととなった。

会合ではこのほか、2011 年 5 月に開設した「東日本大震災特設サイト」の取り扱いについて、震災からまもなく 5 年が経過することからトップページに設置しているバナーを小型化すること、将来的に掲載情報を全美 HP 本体へと統合することについて提案があった。また、かねて懸案となっている会員館ページにおける個別 ID およびパスワードについては、来年度全美総会の時期に合わせて導入に向け準備を進めることとなった。これら一連の成果は逐次、全美 HP へと反映していくことになるので、ぜひ定期的にホームページをチェックいただきたいと思います。

ホームページ部会の活動は一口にホームページの運営とは言っても、全美の活動全体への目配りが必要であり、現行の少人数体制では十全とはいえない。よりよい全美 HP を提供していくためにも、当部会の活動について今後とも積極的なご支援とご協力をお願いできれば幸いである。



第 29 回会合 (京都国立近代美術館)

機関誌部会ではこの一年の間、順調に『ZENBI』の第 7 号 (2015 年 1 月 1 日発行) と第 8 号 (2015 年 8 月 1 日発行) を発行した。このための編集会議および校正の作業を 2014 年 12 月 13 日と 2015 年 7 月 4 日にそれぞれ再開第 18 回部会、再開第 19 回部会として開催した。創刊号の発行から満 4 年を迎え、全国美術館会議の機関誌として『ZENBI』が次第に認知されてきた印象を強くする。

内容的には大きな変化はない。毎号、各ブロックからのブロック報告を 10 本と、第 7 号では部会報告、第 8 号には新規会員館の紹介記事を掲載し、自由投稿欄である「全美フォーラム」には第 7 号に 4 本、第 8 号に 7 本の原稿を掲載した。特に第 8 号の「全美フォーラム」では美術品補償制度に関する記事を三本束ねて、全国美術館会議の活動の大きな成果である美術品補償制度をさらに有効に活用するための提言を行った。制度を導入するだけでなく、さらにブラッシュアップするという意味において、これらの記事は『ZENBI』にとってまことにふさわしく、独自性のある美術ジャーナリズムとして本領を発揮することができたのではなかろうか。このほか、近年話題になっている IPM 問題や CIMAM 年次総会の招致についての記事、さらには美術館における検閲問題をめぐる論考なども『ZENBI』ならではの内容であり、誌面の充実を感じる。少々残念なのは多くの記事が編集部からの呼びかけに応じて寄せられる点である。加盟館職員からのさらに積極的な投稿を期待している。

ミュージアムショップでの販売と広告掲載については前回も報告したが、こちらも定着してきた印象がある。今年度上期の『ZENBI』の売り上げは五つのミュージアムショップで計 66 冊となり、前年度の 52 冊からわずかではあるが伸びている。ショップの中では東京国立近代美術館のミュージアム

ショップの売れ行きが全体の半数以上を占めている。売り上げとしては一万二千円余となり、これに第 7 号 2 社、第 8 号 3 社からの広告料収入を合わせると、多少なりとも経費に関して自助努力を重ねている様子が理解していただけるだろう。ミュージアムショップでの販売、広告のいずれについてもさらに拡充をはかりたいと考えている。販売や広告を希望される美術館や賛助会員企業がれば事務局まで御連絡をいただきたい。

『ZENBI』も来年度でいよいよ第 10 号を迎える。今年度は幹事の交代や部会員の減少といった問題もあったが、編集作業自体はかなりルーティン化を進めることができたように感じる。今後は新しい企画や連載も視野に入れつつ、さらに充実した誌面をめざして部会員一同努力したい。



第 19 回会合 (京都国立近代美術館)

美術館運営制度 研究部会

貝塚 健（かいづか つよし・石橋財団ブリヂストン美術館）

2015 年、美術館運営制度研究部会は、2 月 9 日（第 20 回会合、国立西洋美術館、10 名参加）、5 月 29 日（第 21 回会合、郡山市立美術館、5 名参加）、10 月 16 日（第 22 回会合、国立西洋美術館、6 名参加）の合計 3 回の会合を持った。3 回とも、「美術館の原則と美術館関係者の行動基準」（仮称）の草案づくりに費やされた。会合と会合のあいだにも、部会員間では頻繁に電子メールによる草案をめぐる意見交換が行われている。

この「美術館の原則と美術館関係者の行動基準」は全国美術館会議として策定することをまだ決定したものではない。2014 年度に全会員館を対象に全国美術館会議版行動規範の必要性についてアンケートを実施した結果は、『ZENBI』7 号の大島徹也幹事（当時）の報告にあるように、回答数も少なく、趨勢はどちらとも判然としないうちであった。この状況をみた本部会では、具体的な行動規範の草案を試作してみて、それをあらためて会員館に問うことによって、この課題にひとつの方向性を見つけ出そうということになった。山梨俊夫部会長が草案づくり作業の中心を担っている。草案のもとになったのは、ご承知のとおり、2012 年にまとめられた日本博物館協会版「博物館の原則 博物館関係者の行動規範」である。これをもとにしてつくられた全国美術館会議版の第一草案を 2 月の会合で具体的に検討し、5 月にはそれをバージョンアップした第二草案を俎上にあげて議論した。10 月にはさらに整理された第四草案の逐条検討を出席者で実施している。

このときの議論をそれぞれの出席者が持ち帰って分担作業を行い、それを部会長がまとめてまもなく第五草案ができあがることになっている。こうした度重なる地道な作業を通じて、本部会員のあいだでは、やはりこうした行動規範は美術館界に必要なのではないかというコンセンサスがとれつつある。完成をみた草案は、いづれなんらかのかたちで全国美術館会議会員館のみなさまのご覧に入れて、こうした行動規範の必要性

の有無から幅広い議論をしていただく機会を設けたいと考えている。とくに他の研究部会のみなさまからのご意見を期待しているところである。

一方 10 月の会合で、全国美術館会議事務局から本部会は依頼を受け、2015 年度の学芸員研修会を企画実施することになった。本稿を書いている 2015 年 10 月の時点では、来年 3 月に東京で、テーマを美術著作権と行動基準の二本立てにした研修会を開催しようということになっている。TPP 交渉など社会の変化の激しい影響を受けている著作権や知的財産権の世界は、われわれの日常業務に深く関わっている。また、せつかくの事務局から与えられた機会を使って、本部会で草案作成を進めている行動基準についての議論を深める場にしたいと考えている。いずれ、研修会のご案内は事務局から会員館に送られ、またウェブサイトにも告知がアップされるだろうから、ぜひ多くの方々にご関心をもっていただきたいと願っている。



第 21 回会合（郡山市立美術館）



第 22 回会合（国立西洋美術館）

地域美術 研究部会

山田 諭（やまだ さとし・名古屋美術館）

昨年度発足したばかりの地域美術研究部会では、全国各地の地域美術に関する調査・研究の情報交換を進めるとともに、全国の美術館（学芸員）の相互協力を図ることを、部会の活動の基本方針・目標として、第 2 年目の活動を行った。

今年度最初の第 2 回会合は、全国美術館会議総会の翌日 5 月 29 日に、初代の部会長（鍵岡正謹／岡山県立美術館）の辞任に伴って、新たな部会長（西村勇晴／北九州市立美術館）を迎えて、東北ブロックの郡山市立美術館で開催した。

事例発表「郡山と昭和の美術について」（杉原聡／郡山市立美術館）では、福島県における郡山市の特徴として、明治期の開拓事業に培われた市民精神によって、市立美術館設立の声が挙がり、「郡山に美術館を作る会」の運動が展開されたことが報告され、その中心的存在であった二人の画家―鎌田正蔵と佐藤昭一の画業と活動について紹介された。過去の特別展の際に制作された映像（作家へのインタビューも含めた）も上映され、地域美術研究の成果を記録に残す方が提示された。総会の翌日ということもあって、かなり厳しい日程であったが、部会員など 10 名だけでなく、総会出席者のなかから地域研究部会に関心を持ったオブザーバー参加 7 名を加えた総計 17 名での質疑応答・討議は盛り上がった。

来年度も総会に併せて、5 月 27 日に九州ブロックの福岡県立美術館で会合を開催する予定である。

第 3 回会合は、中国ブロックの広島県立美術館と岡山県立美術館において、11 月 25 日～26 日に開催した。事例発表「広島近代洋画史に見る山路商、燐光の時代」（藤崎綾／広島県立美術館）では、明治期から昭和戦前期までの広島の洋画壇の展開について、作家の動向と美術団体の結成、展示施設の開設、パトロンの活動など、幅広い観点から綿密に解説された。被爆都市において、戦災を免れた数少ない作品を発見・収蔵する苦労を思うと、収蔵庫で見た新発見の燐光

《静物》は輝いていた。

「岡山ゆかりの美術 明治から現代の美術―関わりがあった作家を中心に」（廣瀬就久／岡山県立美術館）では、開館以来、「岡山県ゆかりの美術」だけを収蔵・展示してきた美術館活動の体験を踏まえた報告があった。参加者は部会員など 8 名にオブザーバー参加 4 名と、中国ブロックの美術館からの参加が少なかったのが残念であったが、活発な討議が行われた。

来年度は 11 月頃に関東ブロックの美術館での開催を検討している。



第 3 回会合（郡山市立美術館）



第 4 回会合（岡山県立美術館）

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社	株式会社集英社
有限会社アート・フリース（大阪美術）	株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	一般社団法人全国美術商連合会
株式会社アトリエリーブ	公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
有限会社イー・エム・アイネットワーク	大日本印刷株式会社
イカリ消毒株式会社	株式会社丹青研究所
イセ文化財団	Twitter Japan 株式会社
株式会社 印象社	株式会社 TT トレーディング
株式会社 NHK エデュケーションナル	株式会社 DNP アートコミュニケーションズ
株式会社 NHK プロモーション	株式会社東京美術倶楽部
M&I アート株式会社	凸版印刷株式会社
影山幸一	有限会社 トップアート鎌倉
株式会社加島美術	日本写真印刷株式会社
カトーレック株式会社	日本通運株式会社
公益財団法人かながわ国際交流財団 湘南国際村学術研究センター	株式会社パークウェーブ
関西ペイント販売株式会社	株式会社美術出版社
株式会社ギャラリーためなが	美術年鑑社 新美術新聞
株式会社求龍堂	弘中智子
株式会社キュレイターズ	株式会社伏見工芸
協同組合美術商交友会	有限会社丸栄堂
株式会社グッドフェローズ	ヤマトロジスティクス株式会社
株式会社クレヴィス	読売新聞東京本社
株式会社廣済堂	ライトアンドリヒト株式会社
	早稲田システム開発株式会社

（五十音順）

事務局から

新たな事務局体制について

企画担当幹事 前山裕司（まえやま ゆうじ・埼玉県立近代美術館）

村上博哉前企画担当幹事（国立西洋美術館副館長兼学芸課長）の後を受けて、企画担当幹事となりました。「まだ手探りする天使」はクレーの作品名ですが、まだ手探りするモグラくらいの気分です。五里霧中の走り出しではありますが、総務担当幹事にフォグランプとなってもらい、8月に小松弥生前事務局長の後任として国立西洋美術館副館長に着任された山下和茂さんにも引き続き事務局長としてナビゲーションをお願いしながら、事務局の機能が停滞することのないように精一杯努めたいと思います。

『ZENBI』8号の「事務局から」で、村上さんが触れておられるように、全美事務局は国立西洋美術館から「独立」することになりました。しかし、それは事務局の独立に向けて動き出したという段階で、現状は完全に独立していると言える状況ではありません。事務局は引き続き、西洋美術館内の一室に置かせてもらっています。いずれはどこか別な場所に事務局を移転するとしても、そのための財源が不足していますので、当面は西洋美術館のご理解を得ながら、この状態を継続せざるを得ません。

また、事務局が独立するためには、最も大きな財源の確保という問題以外にも、事務局の組織、職務の範囲、会計規則など、独立前に検討する

べきことが色々あることがわかってきました。見直さなければならないのは、事務局員の勤務に関する小さなことから、大災害時における救援体制にまでおよぶと思われます。

設立から60年以上が経過し、全美ホームページ掲載の建畠会長あいさつに引用された青柳前会長の言葉「提案と主張」の組織への変化、言い換えれば研究部会を先頭にした能動的な組織への意識や体質の変化、そうした成長を支えられる足腰としての事務局となるために、基本から見直しをする作業といえるかもしれません。

しかし、まずは活発に活動している委員会や研究部会の足を引っ張らないように、事務局の体制をどう維持していくか、という現実的な問題に取り組むことになります。そのような目前の課題に取り組みながら、数年の間に独立のための財源を確保し、将来の事務局の姿を考えていくことになるでしょう。

不慣れな企画担当幹事と日々の仕事に追われる総務担当幹事が、そのためにやれることは限られています。会長、副会長をはじめ、役員や各研究部会の方々、そして会員館の方々に、これまで以上にご協力いただくことになると思います。まずはこのような状況をご理解いただくようお願い申し上げます。

編集後記

『ZENBI』の9号をお届けする。いつもどおり、機関誌としてはブロック報告と部会報告を掲載し、「全美フォーラム」には4本の記事が寄せられた。いつも充実した報告や原稿をお寄せいただく執筆者、寄稿者の皆様に感謝したい。

部会報告にも記したとおり、昨年度より開始したミュージアム・ショップにおける一般への販売も堅調に推移している。一般の書店では扱わない雑誌であるが、美術関係者の間では少しずつ知名度を得てきたのではないだろうか。広告も1社から3社、そして5社と、号を重ねるごとに増えてきた。現在、本誌は2000部を印刷しているが、今後はさらに増刷も検討している。

「全美フォーラム」には美術館の改装と閉館という、多くの美術館にとってもはや他人事ではない問題についての原稿が寄せられた。近畿ブロックのブロック報告で岸野氏も述べるとおり、神奈川県立近代美術館鎌倉館の閉館は、単に一美術館の終幕のみならず、多くの美術館にとってモデルであったシステムが一つの曲がり角にさしかかっていることを暗示しているように思われる。新聞社主導のブロックバスターの大展覧会のみが脚光を浴び、学芸員の地道な研究の成果としての展覧会がますます困難になる時代にあって、私たちは新しいモデルを必要としているが、まだそのかたちが明確に見えてこない状況にあるのではないだろうか。

ほかにも美術館をめぐる問題は数多く、根は深い。フォーラムで取り上げたい話題はほかにもいくつかあったのだが、時期尚早という判断や適当な書き手がいなかったため、今回は見送った。自由な投稿によって成り立つ欄であるが、今後も編集部の判断でテンポラリーな話題も随時取り上げつつ、美術館の行く末に思いを向けたいと思う。引き続き積極的な投稿をお待ちしている。

編集後記を脱稿し、校正作業を進めている最中、昨年度まで機関誌部会の幹事をともに務めていただいた京都国立近代美術館の松山利光氏の突然の訃報が届いた。いまだに信じられぬ思いだ。私は近代美術館に勤務していた折も、現在の勤務先に移って機関誌部会の仕事に就いてからも、仕事のうえでは常に松山さんに助けていただいた。第7号の後記にも書いたとおり、本誌が順調に号を重ねることができたのはひとえに松山さんの堅実な仕事ぶりに負っている。温和でダンディなお姿がしのばれる。部会員の感謝の思いとともに本号を松山さんの霊前に捧げることをお許しいただきたい。(O)

『ZENBI』では、
次の要領で広く皆さんからの
原稿をお待ちしています。

〔原稿の内容〕	・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。 ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。 ・原稿には表題を付してください。
〔投稿の資格〕	・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。 ・匿名の投稿は受けつけません。
〔投稿に係る詳細〕	・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。
〔締切〕	・第10号(2016年7月発行予定)に関しては4月30日、 第11号(2017年1月発行予定)については10月31日を締切とします。(当日必着)
〔提出先〕	〈メールの場合〉 s-osaki@pref.tottori.jp (尾崎) aoyama@ma7.momak.go.jp (青山) 〈郵送の場合〉 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館内 全国美術館会議機関誌部会 幹事 青山杏子
〔問い合わせ先〕	内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。 〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館内 全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項
 - (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
 - (2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されていないものに限る。
 - (3) 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
 - (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。
2. 投稿文の採否
 - (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会(以下「部会」という。)に一任とする。
 - (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。
3. 原稿について
 - (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
 - (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
 - (3) 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
 - (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。
4. 校正について
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。
5. 著作権について
 - (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
 - (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。
6. その他
 - (1) 原稿料は支払わない。
 - (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。



丸栄堂

美術商

日本画・洋画・工芸

代表取締役 浅木正勝

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-4-8

TEL. 03-3831-7821 FAX. 03-3831-7771

<http://www.marueido.com>

It's a Beautiful Message



ART

アート印刷株式会社

〒720-0077 広島県福山市南本庄一丁目10番38号 TEL.084-924-5588 FAX.084-931-9360
<http://www.art-g.co.jp>

Optec Spotlight



ERCO Optecは、美術館・博物館の照明に必要な機能と品質を全て持ち、さまざまな展示様式にも柔軟に対応することができるLEDを光源としたスポットライトです。
 ERCO 独自開発・製造の最新型光学レンズシステムにより、作品のみをアクセント照明するスポット配光から、壁面を均一に照射するウォールウォッシュ配光、**8m**超の高天井の空間にも対応する高出力タイプまで幅広く品揃えされており、鑑賞者だけでなく運営者もストレスなく最高の光環境を構築できます。

ERCOでは長年にわたり培ってきた世界中の展示空間における経験をいかして、製品だけではなく、最適な照明ソリューションの提案をいたします。

ERCO

ライトアンドリヒト株式会社 〒105-0014 東京都港区芝2-5-10 TEL:03-5418-8230 / FAX: 03-5418-8238
 ※平成27年1月より社名変更いたしております(旧社名:エルコライティング株式会社)。